

【十二月の言葉（令和四年）】

ありのままを受け入れる大切さ

歳をとらないとわからないことがある

（東京都 高橋君子さん）

仏教の教えは、遠いところにあるものではなく、生活のすぐそばにあります。そして、生きていくうえで大事なことを教えてもらえます。

たとえば、『浄土真宗聖典』の中の「まことのことば」に紹介されている『仏説無量寿経』の一節、「田があれば田で悩み、家があれば家に悩む。……あればあるにつけて憂いはつきない。……また、田がなければ田をほしいと悩み、家がなければ家をほしいと悩む……」これはまさに私のことだと思いました。こういったお経の意味を知るたびに、自分本位に生きてきたことを恥ずかしく思います。

お念仏が心の中にどっしりとある人は、人生に何があっても動じず、病気や死も受け入れられるのではないのでしょうか。

父母たちが、日々の生活に感謝し、老いや死に対しても不安なく、ありのままを受け入れて過ごしていたことが、今、ようやくわかるようになりました。体が弱ったり、衰えたり、歳をとったりしないとわからないことがある、といいますが、本当にそうですね。

（六十五歳からの仏教「より」）

